

短期交換留學前・後學習資源的利用狀況以及理由的變化 —以銘傳大學的交換留學生為對象—

徐孟鈴

銘傳大學應用日語學系副教授

楊珮鈴

銘傳大學應用日語研究所碩士生

摘要

為了瞭解短期交換留學的意義，調查留學生在短期留學期間處於怎樣的學習環境，並且基於何種理由接觸了哪些學習資源，是一個重要的課題。

本稿的調查對象為銘傳大學的 8 名短期交換留學生。將學習資源分為「人的資源」、「物的資源」、「社會情報資源」以後，針對留學生留學前後使用學習資源的狀況以及使用理由進行了問卷調查。

調查的結果得知，留學前後 3 種學習資源的使用狀況及使用理由皆產生了變化。學習資源的利用上雖然有個人的差異，但 8 位學習者的學習資源利用狀況也有許多相同的地方。在留學後，整體學習資源的利用從「校內」向「校外」擴展，利用的理由也從留學前單純的「日文學習」、「聊天」等理由，轉變為有特定目的的「生活」、「興趣」、「為了解日本人」等理由。

透過短期交換留學，學習資源的利用範圍擴大，使用的目的也愈發具體。如果可以將本研究的調查結果提早在留學前告知學習者，相信可以有助於學習者在留學後依照自己的興趣更加善用學習資源，增加學習機會，進而提升留學的教育成效。

關鍵字：短期交換留學、學習資源利用狀況、學習資源利用的理由、問卷調查

受理日期：2017.03.10

通過日期：2017.05.05

**Differences in Learning Resource Use and Reasons of Use
between Before and After Participating in a Short-Term
Exchange Program:
With Ming Chuan University Exchange Students Research
Subjects**

Hsu Meng-Ling

Associate Professor, Ming Chuan University, Taiwan

Yang Pei-Ling

Graduate Student, Ming Chuan University, Taiwan

Abstract

In order to explore the meaning of participating in a short-term exchange program, it is important to study the environments where exchange students learn during their short-term exchange period and which learning resources they use due to what reasons.

The research subjects of this study were 8 Ming Chuan University short-term exchange students. The learning resources were categorized into "human resources", "material resources", and "social information resources". Then a questionnaire survey regarding the learning resources used by these exchange students and their reasons of use before and after they participated in a short-term exchange program.

According to the survey result, the students' use of the three types of resources and their reasons of use had changed after participating in an exchange program. Although the 8 learners were different in learning resource use, there were a lot of similarities as well. After participating in an exchange program, the scope of the learning resources they used expanded from "in campus" to "off campus". And their reasons of use changed from simply "learning Japanese", "chatting", etc. to reasons with a specific purpose, such as "living", "hobby", "understanding the Japanese people", etc.

Keywords: short-term exchange program, short-term exchange student, learning resource use, reason of learning resource use, questionnaire survey.

短期交換留学前・後における学習リソースの利用状況及び理由の変化—銘伝大学の交換留学生を対象に—

徐孟鈴

銘伝大学応用日本語学科副教授

楊珮鈴

銘伝大学応用日本語学科修士課程

要旨

短期交換留学の意義を知るためには、留学生が短期留学を通してどのような理由でどのようなリソースに触れているか、留学生を取り巻くリソース環境全体について調べるのが重要である。

よって本稿は、銘伝の短期交換留学生 8 名を対象とし、留学生が留学前後に利用する学習リソースの状況や理由について考察した。学習リソースを「人的リソース」、「物的リソース」、「社会情報サービスリソース」の 3 つに分けてアンケート調査を行った。

その結果、3 つの学習リソース全て留学前後に利用の状況や理由に変化が見られた。リソースの利用に学習者の個人差があるものの、全体的には共通した特徴や傾向が見られた。留学後、リソース全体の利用が「学内」から「学外」へと広がり、利用の内容が留学前の「日本語学習」のみ、または特に目的を持たない「雑談」などから、具体的な目的を持つ「生活」、「趣味」、「日本人を知りたい」などに変わったことが明らかになった。このような変化から、留学生にとって日本国内全体が全てリソースとなり、そういったリソースを個人の目的に応じてさらに活用し、学習機会を作っていけば留学の教育効果をさらに上げることができると思われる。

キーワード：短期交換留学、短期交換留学生、学習リソースの利用状況、学習リソース利用の理由、アンケート調査

短期交換留学前・後における学習リソースの利用状況及び理由の変化－銘伝大学の交換留学生を対象に－

徐孟鈴

銘伝大学応用日本語学科副教授

楊珮鈴

銘伝大学応用日本語学科修士課程

1. はじめに

短期交換留学が盛んに行われてきている現在、日本語教育では短期留学生にどのような支援をしていくべきかを考えることが重要な課題となっている。短期交換留学を通してどのようなことが体験でき、どのような交流が留学生にとって意味のあることかを調べて、はじめて日本語教育における短期交換留学の意義が分かるだろう。

短期留学生にとって留学目的として、日本語の学習や授業の履修だけではなく、「日本人と交友関係を構築して日本語を習得したい」という強い期待をもつての留学（内海 1999）、日本人との交流、日本文化の「体験」を通じて学ぶことが留学の一番の魅力（二宮・黄 1997）、といった留学経験を通して、自分達だけで日本文化を体験するのではなく、同世代の日本人学生との交流を求めていることが先行研究で報告されている。留学生はチューターや指導教員をはじめとする人の支援への要望が高く、新しい人々との交流、日本人と友達関係を深めることに留学の価値が評価されることも明らかにされている（長谷川・奥村 2007、恒松 2012）。こうした友達関係が深められるよう、提携校が異文化交流のための活動を行い、体験型の文化活動において交流の場を設けたりなど、留学生が望んでいる公開情報を提供していることが明らかになっている。

日本の提携校が留学生にどのような支援や情報を提供しているかについては稿を改めて論じたいが、本稿では、短期留学では留学生がどのような学習体験をしているかを考える視点として「リソース」

を取り上げたい。学習リソースの調査は学習のプロセスを明らかにすることに繋がり、今後の教育、学習支援を考えていく上で意義がある（工藤 2006）。よって、本稿では留学生在が短期留学を通して、どのようなリソースにどのような理由で接触しているか、それは留学前とどのように異なっているかについて調べた。留学生在が短期留学期間中に、どのようなリソースに取り巻かれているかを調べたうえで、これから留学する予定の学生に留学で期待できそうな学習体験や方法を共有し、意識化させたい。短期留学の価値を位置づけたい。

短期留学で留学生在が生活全般にどのような学習リソースをどのような理由で利用しているかを調査するために、以下の研究課題を立てた。

1. 留学生在が留学前に利用する「学習リソース」の状況、理由を調べる。
2. 留学生在が留学して6ヶ月経った頃に利用する「学習リソース」の状況、理由を調べる。
3. 上記の課題1と2を比較して、留学生在が留学前に比べて留学後に利用する「学習リソース」に変化があるかを調べる。

2. 学習リソースについて

2.1 学習リソースの定義

学習リソースを定義した研究は多くある。ここでは田中・斎藤（1993）、トムソン（1997）、岡部（2011）の定義を挙げる。

まず、田中・斎藤（1993）では、学習とは環境との相互作用で、相手に働きかけ、そのことによって相手も自分も変わっていくことであり、学習に関する相互作用の対象となるものを学習のリソースと定義している（p.44-45）。

トムソン（1997）では「実社会での日本語使用のための学習に使い、実際の日本語使用にも役立ち、また、日本語使用の対象となる、すなわち学ぶ材料は学習リソースだと定義している（p.18）」。

また岡部（2011）では、日本語の学習者は日本語を教室の中のみで学んでいるわけではなく、教室外で接触する日本語、さらにはさまざまな機会を通して日本語母語話者と関わることによって学んでい

ると考えられる。様々な状況で学習者が関わるもの、それによって日本語を学習するものが学習のリソースであると述べている (p.1)。

上記の研究を踏まえて、本論文では学習リソースを次のように定義したい。学習リソースとは「実際に学習に役立ち、または相互作用によって学ぶ対象となるモノ、ヒト、場、機会や情報などだ」とする。また、学習リソースとされるモノは直接的に日本語学習に役立たなくても、偶発的に学習が起こっているモノ、学習効果に結びつくモノもあると定義したい。

2.2 学習リソースの分類

学習リソースについて分類した研究には、斎藤(1993)、工藤(2006)、トムソン(1997)と武井(2005)がある。

斎藤(1993)と工藤(2006)は、例は少し異なるものの、学習リソースを「人的リソース」、「物的リソース」、「社会的リソース」の3つに分けている点は共通している。

斎藤(1993)では、それぞれのリソースを以下のように説明し、具体例を挙げている。「人的リソース」とは、人に関するリソースであり、ネイティブとは限定しない。例えば学習仲間、友人、会社の同僚などである。「物的リソース」とは、文字媒体による新聞や雑誌、放送媒体によるテレビ、ラジオなど外国語教育用に加工されたものである。「社会的リソース」とは、日本関連の催し、コンビニ、レストラン、地域のネットワーク、学校や学習グループなどをさしている。「社会的リソース」については、工藤(2006)では、物的、人的リソースが組み込まれたコミュニティ、ネットワークを指すと説明が加えられている。

トムソン(1997)は、リソースの意義を社会言語学、第二言語学、教育学の立場からも検証し、リソースの分類を「人的リソース」、「物的リソース」、「社会的リソース」に「情報サービス・リソース」を加えた。ここでは、「情報サービス・リソース」の定義と具体例のみを挙げておく。

トムソンによれば、情報サービス・リソースとは特に海外における日本に関する情報源としてのリソースである。例えば、インターネット、大学の日本語科、日本文化関連の展覧会情報、日本映画上

映の情報、国際交流基金シドニー、日本文化センター、ワーキング・ホリデー事務所、日本領事館などである。

各リソースは密接に結び付き、あるリソースがいずれか1つの分類に属するものではなく、互いに働きかけながら活用されるものである。といったように、リソースの相互関係を重んじる研究もある(トムソン1997、武井2005)。

本論文では、武井の論考「あるリソースがいずれか一つの分類に属するだけではない」について賛成する立場を取り、上記の先行研究の分類を参考にしたうえで、学習リソースを「人的リソース」、「物的リソース」、「社会情報サービスリソース」の3分類にする。しかしながら、たとえば、パソコンによるインターネットの利用はその利用の仕方によって「物的リソース」にも、「社会情報サービスリソース」にも振り分けることができる。本論では、パソコンによるインターネットが主に日本語学習に使われる場合、「物的リソース」とし、インターネットを日本語に関する情報収集に使う場合は「社会情報サービスリソース」に振り分けることにする。

2.3 学習リソースの先行研究

学習リソースの研究は数多くある(トムソン 1997、石井など 2003、石黒 2004、文野 2004、下平など 2004、小河原など 2005a, 小河原など 2005b)。トムソン(1997)では、学習リソースの使用を教室内から教室外へと広げることを目的とし、プロジェクトワークを企画して学習者に体験させた結果、学習者の学習リソースの使用の範疇が教室内から教室外へと広がり、教室以外のリソース使用も日本語学習にプラスの結果をもたらしたことを報告している。また、李(2006)はリソースを積極的に活用するために必要なリソースの活用能力について提案している。柳川(2008)では、韓国の学習者を初級、初級修了、中級の3つのグループに分けて、それぞれ日本語レベルの違う学習者が利用するリソースについて調査を行っている。

このほか、短期プログラムの英語圏留学生を研究対象に調査を行った研究には岡部(2011)がある。台湾・香港をはじめとするアジア

アの日本語学習者を対象とした研究には、国立国語研究所（2005）、小河原・金田・笠井（2005）、工藤（2006）、鈴木（2007）、津守・平岩（2013）などがある。以下これらの研究成果について述べる。

岡部（2011）は短期留学のプログラムに参加した英語圏の大学に所属している日本語学習者13名を対象に、留学生が日本語の教室外でどのようなリソースと接触しているかについて研究している。その結果、人的リソースとして、留学生を支援する国際交流専門員、チューター、ホストファミリーなどが活躍していることを報告している。これらの人的リソースは留学生に新しい物的リソースを紹介したり、交流の機会の企画・運営など間接的なサポートを行う機能を担っていることも報告されている。また、学習者は1つのリソースに異なった機能を持たせ、リソースを組み合わせるなど能動的なリソースの活用が見られたと述べている。

国立国語研究所¹は、平成13年度より5年計画で、「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施している。この調査はタイ、マレーシア、韓国、台湾、日本における学生及び教師などを対象²とし、国内外の日本語教育、日本語の学習についてアンケート調査及びインタビューを行った。

その中で台湾についての調査結果は3つあり、日本語でやりとりをしている学習者が少なく、やりとりの相手は「日本語の教師」、「学校の友人」「知り合い」で電子メール、チャットによるやりとりが多いことが分かった。やりとりの具体的な内容も日本にある姉妹校との交流に関するものがほとんどであることが明らかになった。

小河原・金田・笠井（2005）は、海外で日本語を学ぶ学習者がどのような学習環境・手段で学習しているかについて研究している。タイ、韓国、台湾、マレーシアの学習者を研究対象とし、アンケート調査を行った。

その結果、海外で学ぶ学習者は、普段日本語で人とやりとりをす

¹国立国語研究所（2003）、（2004）、（2005）、（2006）

²10代が89.7%、20代が74.6、学校教育以外20代が49.1、30代以上が半数近くを占めている。

る者が少ないことが分かった。また、日本語でやりとりしている相手は、「日本語の教師」、「学校の友人」、「知り合い」などである。ついで、物的リソースに関しては、日本の「マンガ」「ゲームソフト」「CD」といった大衆文化の影響が見られ、「テレビ」の利用が多いことが共通している。特に台湾では「テレビ」の割合が他の国より多いことが明らかになった。場（機会）のリソースについては、日本フェアや日本の伝統文化を紹介するイベントでの接触が多い。台湾の場合、日本語の曲を含むカラオケボックスが街のいたる所にあり、それをよく利用するのが台湾の特徴だと述べている。

工藤節子(2006)は、台湾の日本語学習者が利用する学習リソースの種類についてインタビュー調査を行っている。研究対象は日本語を学んでいる学習者をはじめとする5つのグループである。その結果、まず高校生・大学生グループは、インターネットなどのサイト情報というリソースの利用が多いことが分かった。また、社会人グループの場合は、塾の教師(人的リソース)、教科書、問題集(物的リソース)というリソースの利用が多い。そして、年配者グループの場合は社会文化理解を進めるためのリソースの使用が多いが、インターネットの利用は見られなかった。工藤は5つのグループの日本語学習者が使用する学習リソースは、年齢や関心、学習目的の違いによって異なる傾向があると述べている。

鈴木(2007)は、英語圏出身者中心の初級学習者から漢字圏出身中心の上級学習者まで履修できるクラスである個別対応型授業において、学習者が大衆文化に関して、どのようなものをどのように使用したかを研究している。学習者に2回、半構造化インタビューをした結果、「歌・マンガ・アニメ・映画・ドラマ・テレビバラエティ番組・雑誌・ゲーム・その他」などのジャンルのリソースが利用されていることが分かった。

同じリソースでもその利用方法と利用状況は学習者によって異なり、学習者が関心があると学習効果が出やすく、面白いといった感情がそのリソースに対する関心を強め、そのリソースを使った学習

を継続していく原動力となっていると述べている。学習者が身近にリソースを組み合わせて利用できる状況が学習に良い影響を及ぼすと報告されている。

津守・平岩(2013)は、台湾・香港で学ぶ中上級レベルの成人日本語学習者 5 名を対象に、学習リソースの利用状況について研究している。その結果、学習者全員が物的リソースとして、パソコン、テレビ、新聞、携帯電話、日本の商品などを活用しており、人的リソースについては、日本語教師や日本人の家族などと接触していることが報告されている。リソースの利用目的や選択理由は人によって大きく異なっているが、学習者が自分の興味や関心を満たす目的でリソースを選んだことが多いことが報告されている。調査後のインタビューでは、学習者がリソースとの接触によって、自身の日本語力不足を感じたこともあるが、学習動機につながった影響があることも明らかになっている。

上記の先行研究では、アジアをはじめ英語圏の日本語学習者の学習リソースの利用目的、利用方法などについて明らかになった。しかしながら、学習者を支援していくためには、教室の外で何が起きているのかを知る必要があり、また学習を支援するために、学習者がどのようなリソースに取り巻かれているか、リソースがより活用されるにはどうすればよいかが今後の重要な課題であると報告している。

そこで、本稿では教室内に限らず、短期交換留学生である台湾人日本語学習者が留学前や留学して6ヶ月経った時点までに接触する「人的リソース」、「物的リソース」、「社会情報サービスリソース」全般について調査を行うこととした。

3. アンケート調査の実施

本研究では、留学生が留学前・後に利用する学習リソースの変化を明らかにするため、アンケート調査を行った。1回目は留学前、

2 回目は留学して 6 ヶ月経った時点で実施した³。

3.1 調査対象

調査の対象は銘伝大学に在籍し、2015 年 9 月から各姉妹校⁴へ交換留学した短期交換留学生 8 名である。

3.2 アンケート調査の質問構成

アンケート調査の質問項目は、国立国語研究所⁵による 2003 年から 2006 年の報告書及び工藤(2006)を参考に作成した。

アンケートは 23 問から構成されており、大きく 4 つのパートに分かれる。まずパート 1 は個人情報と学習動機についてである(5 問)。パート 2 は【人的リソースの利用状況】(7 問)、パート 3 は【物的リソース】(6 問)であり、パート 4 は【社会情報サービスリソース】である(5 問)。それぞれの質問項目は 4.1.1、4.2.1、4.3.1 で実例を提示する。なお、アンケート調査後、確認が必要だと思われる箇所についてはフォローインタビューを行った。

4. 調査の結果

4.1 「人的リソース」における留学前・後の変化

留学生を取り巻く環境には授業の教師や勉強の仲間以外に、国際交流専門教員、留学生の生活や学業などを支援するチューター、ホストファミリーなどの人的リソースが考えられる。ノンネイティブではあるが、日本語学習の助けとなるヒトも人的リソースと本論文は認める。

本節では「人的リソース」における留学前・後の変化について報告する。4.1.1 節では「人的リソース」に関するアンケートの質問項目を提示しておく。4.1.2 節で調査の結果として留学生 Z の結果をあげる。4.1.3 節では 8 名の留学生の結果をまとめて説明する。

4.1.1 「人的リソース」に関する質問項目

アンケートの質問 6 から 12 までは「人的リソース」に関する質問

³ アンケートは 2015 年 9 月に 1 回目、2016 年 6 月に 2 回目を実施した。

⁴ 苫小牧駒沢、山形、白鷗、明海、産業能率、同志社、鳥取、名古屋外国語大学。

⁵ 国立国語研究所(2003)、(2004)、(2005)、(2006)

項目である。実際の質問票⁶は以下の通りである。

質問票 6-12 問：

6. 日本語で誰とやりとりしますか。やりとりする人全員の番号、そして、その方法を選んでVをつけてください。(複数回答可)

問題	対象 方 法	対面で話 す	電子メー ル	SMS	手紙	インター ネット でのチャ ット	電話
例	友達	V		V		V	V
1	教師 (NS) ⁷						
2	教師 (NNS)						
3	クラスメート (NS)						
4	クラスメート (NNS)						
5	その他 (例:チューター)						
6	事務室の人 (NS)						
7	事務室の人 (NNS)						
8	校外の人 (NS) 例:大家さん						
9	校外の人(NNS)						
7. Q6 で V をした中で最もよく日本語でやりとりをする人は誰ですか。(3つを選んでください)							
対象 1. _____ 対象 2. _____ 対象 3. _____							
8. やり取りの頻度はどのぐらいですか。 1. 月に 2,3 回 2. 週に 1 回 3. 週に 2,3 回 4. 毎日							
対象 1. _____ 対象 2. _____ 対象 3. _____							
9. やり取りの主な手段は何ですか。 1. 対面で話す 2. Eメール 3. SMS 4. 手紙 5. インターネットでのチャット 6. 電話							
対象 1. _____ 対象 2. _____ 対象 3. _____							
11. やり取りの話題は何に関してですか。(複数回答可) 1. 雑談 2. 日本語学習 3. 生活 4. 趣味 5. その他 _____							
対象 1. _____ 対象 2. _____ 対象 3. _____							
12. その人とやりとりをする時、なぜ日本語を使いましたか。(複数回答可) 1. 日本語を使うのは楽しい 2. 日本語の母語話者と話したい 3. 日本語能力の維持、向上 4. 日本語が両方の共通言語 5. 相手が日本語を使用しているため 6. 環境制限							
対象 1. _____ 対象 2. _____ 対象 3. _____							

4.1.2 留学生 Z の結果

上記の質問での調査結果を留学生 Z を例に取り上げて提示したい。

表 1 留学生 Z の留学前・後における人的リソースの利用結果

留学前

⁶ アンケート実施時は中国語だったが、ここでは日本語に訳して提示する。

⁷ ここでは NS はネイティブスピーカーの、NNS はノンネイティブスピーカーの略称である。

使用順番	頻度	内容	方式	理由
1. クラスメート (NS)	週に 2、3 回	生活	対面	母語話者と話したい 日本語能力を維持、向上 日本語が両方の共通言語 相手が日本語を使用している
2. 教師 (NS)	週に 1 回	日本語学習	対面	日本語が両方の共通言語 相手が日本語を使用している
3. 教師 (NNS)	月に 2、3 回	日本語学習	対面	相手が日本語を使用している
留学後				
利用順番	頻度	内容	方式	利用の理由
1. 教師 (NS)	毎日	日本語学習	対面	日本語が両方の共通言語 相手が日本語を使用している 環境制限
2. クラスメート (NS)	週に 2、3 回	生活 趣味	対面	母語話者と話したい 日本語能力を維持、向上 相手が日本語を使用している 日本語が両方の共通言語 環境制限
3. 校外の人 (NS)	月に 2、3 回	生活	対面	日本語が両方の共通言語 相手が日本語を使用している 環境制限

上記の表 1 は留学生 Z の留学前・後における人的リソースの使用状況である。表 1 の通り、留学前の人的リソースの【使用順番】は「クラスメート (NS) ⁸⁾ ⇒ 「教師 (NS)」 ⇒ 「教師 (NNS)」である。【頻度】は「週に 2、3 回」 ⇒ 「週に 1 回」 ⇒ 「月に 2、3 回」である。【内容】は「生活」と「日本語学習」である。また、【方式】は全て「対面」であり、【利用の理由】は「母語話者と話したい」、「日本語能力の維持・向上」、「日本語が両方の共通言語」そして「相手が日本語を使用している」などである。

それに対して、留学後の【使用順番】は「教師 (NS)」 ⇒ 「クラスメート (NS)」 ⇒ 「校外の人 (NS)」に変わっている。【内容】は「日本語学習」、「生活」、「趣味」などである。【方式】はいずれも「対面」であり、【利用の理由】は留学前の理由に「環境制限」がプラスされている。

留学生 Z の人的リソースの利用については、まず、利用相手の【利用順番】が変わっている。留学前一番よく話した相手は「クラスメート (NS)」であったが、留学後は、「教師 (NS)」に変わった。そして、

⁸⁾ インタビューによると、クラスメート (NS) は日本から来た交換留学生の日本語母語話者だそうである。

話の相手が「教師(NNS)」から「校外の人(NS)」に変わったことも分かった。また、教師(NS)と話す【頻度】も「週に1回」から「毎日」に変わっている。【方式】は留学前・後ともに「対面」で変わっていない。【内容】に関しては留学前が「日本語学習」が多かったが、留学後は「生活」や「趣味」に広がったことが分かった。最後に、【利用の理由】で特に変わったのは、留学後に「環境制限」という項目がプラスされていることである。これは、日本国内にいる場合、学習意識の有無を論じる前に「環境制限」により、どのような場合でも自然に日本語を使用してしまっていることが考えられる。そのほかに留学生Zの特徴として、留学前・後ともに「日本語母語話者と話したい」、「日本語能力を維持・向上」のために「人的リソース」を利用したことが分かった。今回の調査では、留学生Zのように留学前から意識的に日本語学習のために、「人的リソース」を利用している学習者がほとんどである。これは短期留学試験に合格してから日本に行く前の間、学生が留学に備えて母語話者に積極的に接触しようとしているためだと思われる。また、短期交換留学試験で選抜する時の条件として、積極的に学科のイベントや活動に参加している人を優先するため、受かった学生は他の学生に比べて、普段から学習意識を持って積極的に日本や日本人に関わっていることも考えられる。

4.1.3 8人の「人的リソース」の利用のまとめ

前節では、留学生1人1人について留学前・後における「人的リソース」の利用状況についての調査を行った。リソースの利用には個人差はあるが、ここでは、調査対象となる8人の留学生が留学前・後に利用した「人的リソース」の【トップ3】を下記の表にまとめて報告する。表2で示したように、留学前に学生達が使う「人的リソース」の【トップ3】は、1.「教師(NNS)」(6名)→2.「クラスメート(NS)」(5名)→3.「教師(NS)」(4名)及び「クラスメート(NNS)」(4名)である。【頻度】は「毎日」から「週2.3回」程度である。【方式】は2名を除いて、全て「対面」であった。【内容】については、「先生」とは「雑談、勉強」、「クラスメート」とは「雑談、生活」が多

い。【利用の理由】については、「相手が日本語を使用している」、「日本語能力の維持・向上」、「母語話者と話したい」などに集中しており、はっきりした傾向が見られた。

表2 留学生8人における留学前・後の「人的リソース」の【トップ3】の利用

留学前				
トップ3	頻度	方式	内容	利用の理由 ⁹
1. 教師(NNS) (6名)	週に2.3回 (3名) 週に1回 (2名) 毎日 (1名)	対面 (6名)	1. 雑談 (5名) 2. 勉強 (3名)	1. ・相手が日本語を使用している (5名) ・日本語能力の維持・向上 (3名)
2. クラスメート(NS) (5名)	毎日 (2名) 週に2.3回 (1名) 週に1回 (1名) 月に2.3回 (1名)	対面 (4名) インターネットでのチャット (1名)	1. 生活 (5名) 2. 雑談 (3名)	1. ・母語話者と話したい ・日本語能力の維持・向上 (5名) 2. ・相手が日本語を使用している (4名)
3. 教師(NS) (4名)	毎日 (2名) 週に2.3回 (1名) 週に1回 (1名)	対面 (4名)	1. 雑談 (4名) 2. 勉強 (3名)	1. ・相手が日本語使用している (4名) 2. ・日本語能力の維持・向上 (3名)
3. クラスメート(NNS) (4名)	週に2.3回 (3名) 週に1回 (1名)	対面 (3名) インターネットでのチャット (1名)	1. 雑談 生活 (3名)	1. ・楽しい (4名) 2. ・日本語能力の維持・向上 (4名)
留学後				
トップ3	頻度	方式	内容	利用の理由
1. クラスメート(NS) (7名)	週に2.3回 (5名) 週に1回 (2名)	対面 (7名)	1. 生活 (6名)	1. ・相手が日本語を使用している (5名) 2. ・母語話者と話したい (4名)
2. 教師(NS) (6名)	毎日 (3名) 週に2.3回	対面 (5名) SMS	1. 雑談 (4名)	1. 日本語両方の共通言語 (4名) 2. ・日本語能力の維持

⁹話題については複数回答可となっているため、1人複数の選択ができるが、ここでは、3人以上が選択した項目のみ提示することとした。

⁹理由は話題と同じく複数回答可となっている。ここでは3人以上が選択した項目のみ提示することとした。

	(3名)	(1名)		持・向上 (3名) ・相手が日本語を使用している ・環境制限 (3名)
3. 校外の人 (NS) (5名)	週に 2.3 (2名) 毎日 (2名) 月に 2.3回 (1名)	対面 (5名)	1. 生活 (4名)	1. ・相手が日本語を使用している (5名) 2. ・日本語両方の共通言語 (4名) 3. ・環境制限 (3名)

一方、留学後にもっとも多く利用した人的リソースは、1. 「クラスメート (NS)」 (7名) → 2. 「教師 (NS)」 (6名) → 3. 「校外の人」 (5名) である。【頻度】は「週 2.3回」から「毎日」で留学前に比べると増えた。【方式】についてはほとんど「対面」である。【内容】については「教師」とは「雑談」、「クラスメート」や「校外の人」とは「生活」上の話をすることが多かった。【利用の理由】については「相手が日本語を使用している」、「母語話者と話したい」は留学前と同じが、それに「相手が両方の共通言語」、「環境制限」という理由が加わった。

ここまで留学生 8人の「人的リソース」の留学前・後の利用状況について見てきたが、留学前に留学生を取り巻く「人的リソース」で最も多かったのは学内の教師やクラスメートであり、【内容】は「雑談、勉強」が主である。【利用の理由】は「母語話者と話したい」、「日本語能力の維持・向上」であることが分かった。それに比べて、留学後には留学生の「人的リソース」の利用は学内から学外へと広がり、【内容】も「雑談や日本語学習」から「生活」に移っていった。

またリソース【利用の理由】には、留学後は「環境制限」という理由が加わったが、これは日本滞在中、特に自分が意識しなくても日本語に囲まれる環境のもとで、自然に日本語を使用することになったためである。そうとはいえ、今回の 8人の被験者は、留学前から自分の日本語能力の維持・向上のために、母語話者と話すチャンスを逃がさないようにしていることがここで改めて分かった。もう 1つ結果として分かったのが先行研究の結果とは違い、今回調査した留学生には、「チューター」がついた留学生が 1人もおらず、国際

交流の専門教員との交流も少なかったことである。

4.2 「物的リソース」における留学前・後の変化

「物的リソース」については、日本語の授業で使うテキストや辞書以外に、日本語の学習に利用するアニメや漫画、ゲームの攻略本なども含むことにした。また、授業の課題を解くために、コンピューター（インターネット）の利用もここでは「物的リソース」にしている。

4.2節では物的リソースにおける留学前・後の変化について報告する。4.2.1節では物的リソースに関するアンケートの質問項目を提示する。4.2.2節で調査の結果として留学生 T の結果をあげる。

4.2.3節では 8 名の留学生の結果をまとめて説明する。

4.2.1 「物的リソース」の質問項目

アンケートの質問 13 から 18 までは「物的リソース」に関する質問項目である。実際の質問票は以下の通りである。

質問票 13-18 問：

13. 授業以外で日本語が使われている物的リソースを利用していますか。

はい (Q14 へ) いいえ (Q19 へ)

14. 授業以外でどのような物的リソースを利用していますか。(複数回答可)

1. 新聞
2. 雑誌
3. 本
4. 漫画・アニメ
5. 商品カタログ
6. テレビ(ニュース・ドラマ・映画・番組など)
7. ラジオ
8. DVD
9. コンピューター(インターネットなど)
10. ゲームソフト
11. 看板・日本語のメニュー

15. 14 問に引き続き、1 から 11 までの選択肢の中、最もよく利用する物的リソースは何ですか。(もっとも利用した順番に 3 つを書いてください)

項目 1. _____ 項目 2. _____ 項目 3. _____

16. 上記の利用頻度はそれぞれどのぐらいですか。

1. 月 2. 3 回 2. 週に 1 回 3. 週に 2. 3 回 4. 毎日

項目 1. _____ 項目 2. _____ 項目 3. _____

17. 主にどのような内容ですか。(複数回答可)

- | | |
|----------|-------------|
| 1. 社会・生活 | 2. 文化・芸術 |
| 3. 運動 | 4. 日本語学習 |
| 5. 日本人 | 6. 日本に関する物事 |

項目 1. _____ 項目 2. _____ 項目 3. _____

18. 上記の物的リソースを利用した理由は何ですか。(複数回答可)

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. 面白い | 2. 日本語に触れたい |
| 3. 日本語能力を試してみたい | 4. 日本語能力の維持・向上 |

5. 様々な情報をもらえる	6. 日本や日本人について知りたい
7. 研究のため	
項目 1. _____	項目 2. _____ 項目 3. _____

4.2.2 留学生 T の結果

上記の質問で調査した結果を留学生 T を例に取り上げて提示する。

表 3 留学生 T の留学前・後における物的リソースの利用結果

留学前			
利用順番	頻度	内容	利用の理由
1. コンピューター	毎日	日本語学習	面白い
2. 本	毎日	日本語学習	面白い
3. テレビ	毎日	日本語学習	面白い
留学後			
利用順番	頻度	内容	利用の理由
1. 本	毎日	日本語学習	面白い
2. コンピューター	週に 2、3 回	社会・生活	様々な情報をもらえる
3. テレビ	週に 2、3 回	文化・芸術	研究のため

上記の表 3 の通り、留学生 T が留学前に利用した「物的リソース」のトップ 3 は、「コンピューター」(毎日) ⇒ 「本」(毎日) ⇒ 「テレビ」(毎日) であり、それらのリソースを通して触れたのは「日本語学習」のための知識である。そして、【利用の理由】はいずれも「面白い」からである。

留学生 T が留学後に使用した「物的リソース」のトップ 3 は留学前と同じである。ただし、【頻度】が「毎日」から「週に 2.3 回」と減ったことが分かった。さらに、【利用の理由】が留学前の「面白い」のみから「様々な情報がもらえる」、「研究のため」へと生活や研究のための情報収集として利用することに変化している。

留学生 T の場合は大学院の授業を受けているため、他の学習者に比べて研究や資料収集のための「本」の利用が多い。インタビューによると、留学中「本」の利用が多かったため、「コンピューター」や「テレビ」などを趣味で利用したのが若干少なくなったそうである。

4.2.3 8 人の物的リソースのまとめ

前節では、留学生 1 人 1 人について留学前・後における「物的リソース」の利用状況について調査を行った。本節では 8 人の留学生が留学前・後に利用した「物的リソース」の【トップ 3】について下記の表 4 にまとめて報告する。

留学生 8 人の「物的リソース」利用の【トップ 3】は下記の表 4

の通りである。

表 4 留学生 8 人の留学前・後の「物的リソース」の【トップ 3】の利用

留学前			
トップ 3 のリソース	頻度	内容	利用の理由
1. テレビ (8 名)	週に 2.3 回 (5 名) 毎日 (3 名)	1. 日本に関する物事 (5 名) 2. 社会・生活 文化・芸術 (3 名)	1. ・面白い (7 名) 2. ・日本語に触れたい ・様々な情報がもらえる (4 名) 3. ・日本語の能力を試したい ・日本人や日本について知りたい (3 名)
2. コンピューター (5 名)	毎日 (4 名) 週に 2.3 (3 名)	1. 日本語学習 (4 名)	1. ・様々な情報がもらえる (4 名) 2. ・面白い (3 名) 3. ・日本人や日本について知りたい (3 名)
3. 本 (4 名)	週に 2.3 (2 名) 毎日 (2 名)	1. 文化・芸術 (3 名) 2. 日本語学習 (3 名)	1. ・日本語に触れたい (3 名) 2. ・日本語能力の維持・向上 (3 名)
留学後			
トップ 3 のリソース	頻度	内容	利用の理由
1. コンピューター (8 名)	毎日 (6 名) 週に 2.3 回 (2 名)	1. 社会・生活 (6 名)	1. ・様々な情報がもらえる (6 名) 2. ・面白い (5 名) 3. ・日本語能力の維持・向上 (3 名)
2. テレビ (6 名)	毎日 (3 名) 週に 2.3 回 (3 名)	1. 社会・生活 (6 名)	1. ・面白い (6 名) 2. ・様々な情報がもらえる (6 名) 3. ・日本人や日本について知りたい (6 名)
3. 漫画・アニメ (3 名)	週に 2.3 回 (3 名)	1. 日本に関する物事 (1 名) 2. 日本人 (1 名) 3. 運動 (1 名)	1. ・日本人や日本について知りたい (2 名) 2. ・面白い (1 名)
3. 看板・日本語メニュー (3 名)	毎日 (3 名)	1. 日本に関する物事 (1 名) 2. 社会・生活 (1 名) 3. 文化・芸術 (1 名)	1. ・面白い ・日本語に触れたい ・日本人や日本について知りたい ・様々な情報がもらえる (1 名)

まず、留学前のトップ 3 は「テレビ (8 名) → コンピューター (5 名) → 本 (4 名) である。そのいずれも【頻度】が「毎日」から「週 2.3 回」がそれぞれ半数程度を占めている。テレビの場合は、「日本

に関する物事」から「社会生活」など全般的に利用されている。コンピューターの場合は「日本語の学習」に利用する人が半数を占めている。本の場合は、それぞれ「文化・芸術」、「日本語学習」に利用される。【頻度】は「毎日」から「週 2.3 回」程度が多かった。【利用の理由】については、「テレビ」と「コンピューター」の場合は「面白い」、「様々な情報がもらえる」、「日本語に触れたい」と答えた人が最も多かった。「本」の場合は「日本語に触れたい」、「日本語能力の維持・向上」などの理由で用いられている。また、留学前に学習者が利用する「物的リソース」には、「趣味」（テレビやパソコン）に用いるものと「日本語の学習」（本）に用いるものの両方があることが分かった。

一方、留学後に利用する「物的リソース」のトップ 3 は、1. 「コンピューター」（8 名）→2. テレビ（6 名）→3. 「漫画・アニメ」（3 名）である。トップ 2 については留学前とは変わらなかったが、「コンピューター」と「テレビ」の【頻度】は、8 名中、6 名が毎日利用するようになったことが目立っている。また、【内容】については「社会・生活」のためにもっとも多く利用していることが分かった。ついで、「テレビ、漫画・アニメ」の利用は留学前と同じで、増えたのは「看板・日本語のメニュー」である。【利用の理由】については、「様々な情報がもらえる」、「面白い」、「日本や日本人を知りたい」などが多かった。

「物的リソース」の利用については、留学前は「日本語学習」のためという目的だったのがだんだん「日本の社会・日本人の生活」、「様々な情報をもらう」、「面白い」へと変わっていったことが分かった。

4.3 「社会情報サービスリソース」の留学前・後の変化

場や人的リソースを活用した「体験学習」（本稿でいう「社会情報サービスリソース」）は、学習者の興味を引き、動機付けの効果があるとともに、総合的学習効果も期待できる（李 1998）。

本節では「社会情報サービスリソース」における留学前・後の変化について報告する。4.3.1 節では「社会情報サービスリソース」に関するアンケートの質問項目を提示しておく。4.3.2 節で調査の

結果として留学生 X の結果をあげる。4.3.3 節では 8 名の留学生の結果をまとめて説明する。

4.3.1 「社会情報サービスリソース」の質問項目

アンケートの質問 19 から 23 までは「社会情報サービスリソース」に関する質問項目である。実際の質問票は以下の通りである。

質問票 19-23 問：

19. 過去 1 年の間に次の表のような機会あるいは体験を通して、日本人や日本語に接したことがありますか。

はい (Q20) いいえ (21 へ)

20. 経験したことがあるものの番号に V をしてください

題号	機会・場所	
1	日本人との交流会	
2	日本人家庭への訪問・ホームステイ	
3	自宅への日本人の訪問・ホームステイ	
4	日本語のスピーチ・コンテスト	
5	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事	
6	日本・日本語に関するイベントに参加する	
7	日本人のいる場所・日本人が集まる場所	
8	日本・日本語に関する資料センター・図書館 (例：交流協会の日本語センター)	
9	カラオケ、コンビニ、スーパー	
10	入国管理局、区役所	
11	銀行・郵便局	

21. 上記のリソースを利用した理由は何ですか。(3 つ選んでください)

1. 日本語に触れたい
2. 様々な情報をもらえる
3. 日本語能力を維持、向上
4. 日本語母語話者と話したい
5. 環境制限や生活の必要
6. 体験してみたい
7. 姉妹校から機会を提供している
8. その他：-----

22. 日本に関する情報を収集するために、現在利用している学習リソースを選んでください。

1. 新聞
2. 雑誌
3. 本
4. 漫画・アニメ
5. 商品カタログ
6. テレビ(ニュース・ドラマ・映画・番組など)
7. ラジオ
8. DVD
9. コンピューター (インターネットなど)
10. ゲームソフト
11. 看板・日本語のメニュー

23. 上記のリソースを利用する理由は何ですか。(3 つ選んでください)

1. 日本語学習
2. 生活に必要
3. 趣味
4. 環境制限
5. 学校が上記のリソースを提供してくれるから
6. 何も考えずに利用する

7. その他 : _____

4.3.2 留学生 X の結果

上記の質問で調査した結果を留学生 X の結果を例に取り上げて提示したい。

下記の表 5 の通り、「社会情報サービスリソース」は【体験型】と【情報型】に大きく 2 つに分かれる。さらに、【体験型】には「学内」、「学外」、「生活手続きなど」に分類した。

表 5 留学生 X の留学前・後の「社会情報サービスリソース」の利用結果

留学前				
	【体験型】	利用の理由	【情報型】	利用の理由
学内	1. スピーチコンテスト	1. 日本語に触れたい 2. 日本語能力の維持、向上 3. 体験してみたい	インターネット 日本語の小説・新聞などの読み物 日本語のテレビ番組・映画 看板 店内の日本語のメニュー	1. 日本語学習 2. 趣味 3. 何も考えずに利用する
学外	1. 日本、日本語に関するイベントに参加する			
生続き手	なし			
留学後				
	【体験型】	利用の理由	【情報型】	利用の理由
学内	1. 日本人との交流会 2. スピーチコンテスト 3. 図書館	1. 母語話者と話したい 2. 生活に必要な 3. 体験してみたい 4. 友達ができるため	インターネット 日本語のテレビ番組 日本語の映画 看板 店内の日本語のメニュー	1. 日本語学習 2. 趣味 3. 何も考えずに利用する
学外	1. 日本・日本語に関する資料センター 2. 日本人が集まっている場所 3. 日本、日本語に関するイベントに参加する			
生続き手	1. カラオケ・コンビニ・スーパー 2. 入国管理局・区役所 3. 銀行・郵便局			

留学生 X は留学前に、【体験型】では「学内」の「スピーチコンテスト」と「学外」の「日本、日本語に関するイベント」のみに参加した。【利用の理由】は「日本語に触れたい」、「日本語能力を維持、向上」、「体験してみたい」などである。一方、【情報型】では、「インターネット」、「日本語の小説・新聞などの読み物」、「日本語のテレ

び番組・映画」、「看板」、「日本語のメニュー」などを「日本語学習」、「趣味」、「生活」といった理由で利用していた。

留学後には、表 5 のように明らかに「社会情報サービスリソース」の利用が幅広くなったことが分かった。【体験型】の利用では、「学内」のリソースの利用が増えたのをはじめ、留学前に利用がなかった「学外」のリソース、「生活手続き」のためのリソースが数多く増えた。これに対して【情報型】の利用は、留学前から多かったが、留学後も続いて利用している。留学後に利用が減ったのは「日本語の小説・新聞などの読み物」のみである。

留学生 X の「社会情報サービスリソース」の利用状況から見ると、留学後に【体験型】のうちの「学内」、「学外」、「生活手続き」のリソースの利用がかなり増えたことがわかった。また、インタビューによると、X は留学後に、「友達ができる」といった理由で、留学生会が開催していたイベントに参加していた。また、留学後に、「母語話者と話したい」といった理由で、「サークル（日中会話クラブ）」にも参加していた。さらに、教師がスタッフを募集していたため、「神楽岡社神幸祭」のような地域の活動も参加していた。X のケースからは留学生が人的リソースを介して社会リソースに接触したり、また逆に社会リソースを体験することによって人的リソースの輪を広げることにつながるということが分かった。

4.3.3 留学生 8 人の「社会・情報サービスリソース」利用

前節のように留学生 1 人 1 人について留学前・後における「社会情報サービスリソース」の利用状況について調査を行った。本節では、8 人の留学生における「社会情報サービスリソース」を「留学前」と「留学後」に利用した【体験型】及び【情報型】の【トップ 3 のリソース】を下記の 2 つの表にまとめて報告する。まず、「社会情報サービスリソース」【体験型】の留学前・後の変化について表 6 から見ていく。

表 6 留学生 8 人の留学前・後の【体験型】リソースの利用の【トップ 3】

留学前	
【体験型】トップ 3	利用の理由
1. 日本人との交流会（4 名）	1. 日本語に触れたい（5 名）

2. アルバイト・仕事 (4名)	2. 日本語能力の維持、向上 (4名)
3. 日本人のいる場所・日本人が集まる場所 (4名)	3. 体験してみたい (4名)
留学後	
【体験型】 トップ 3	利用の理由
1. 日本人のいる場所・日本人が集まる場所 (8名)	1. 生活に必要 (5名) 2. 母語話者と話したい (4名) 3. 姉妹校から機会を提供している (4名)
2. 日本・日本語に関する資料センター、図書館 (例: 交流協会の日本語センター) (8名)	
3. カラオケ、コンビニ、スーパー (8名) 入国管理局、区役所 (8名) 銀行・郵便局 (8名)	

上記の表 6 の通り、留学前の【体験型】「社会情報サービスリソース」のトップ 3 は、1. 「日本人との交流会」→2. 「アルバイト・仕事」→3. 「日本人のいる場所・集まる場所」である。【利用の理由】は「日本語に触れたい」、「日本語能力の維持、向上」、「体験したい」などである。

一方、留学後に利用した【体験型】「社会情報サービスリソース」の【トップ 3】は、1. 「日本人のいる場所・日本人が集まる場所」→2. 「日本・日本語に関する資料センター、図書館」→3. 「カラオケなど、入管、銀行、郵便局」である。利用の理由は「環境制限・生活に必要」、「母語話者と話したい」、「姉妹校から機会を提供している」である。

【体験型】の「社会情報サービスリソース」で、学習者が大きく変わったのは、「日本語に関する資料」のための図書館などの利用が増えたのと、「生活に必要な手続き」をするために「入管、銀行、郵便局」の利用が目立つようになったこと、また「母語話者と話したい」ために、姉妹校が提供した日本人と交流するための機会も積極的に参加するようになったことである。

次に【情報型】の「社会情報サービスリソース」の留学前・後の変化を下記の表 7 でまとめる。

表 7 留学生 8 人の留学前後の【情報型】リソース【トップ 3】の利用

留学前	
【情報型】 トップ 3	利用の理由
1. 日本語テレビ番組 (8名)	1. 日本語学習 (8名) 2. 趣味 (8名) 3. 何も考えずに利用する (6名)
2. インターネット (7名)	
3. 日本語の漫画・アニメ (7名)	
留学後	

【情報型】トップ3	利用の理由
1. インターネット（7名）	1. 趣味（8名） 2. 何も考えずに利用する（6名） 3. 日本語学習（5名）
2. 日本語の漫画・アニメ（7名）	
3. 日本語のテレビ番組（6名）	
4. 日本語の映画（6名）	
5. 日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物（6名）	
6. 看板・メニュー（6名）	

表7の通り、留学前に利用した【情報型】「社会情報サービスリソース」の【トップ3】は、1.「日本語テレビ番組」→2.「インターネット」→3.「日本語の漫画・アニメ」で、【利用の理由】は1.「日本語学習」→2.「趣味」→3.「何も考えずに利用する」である。

一方、留学後に利用した【情報型】「社会情報サービスリソース」の【トップ3】は、1.「インターネット」、「日本語の漫画・アニメ」→2.日本語の「テレビ番組」、「映画」、「小説雑誌、新聞」、「看板・メニュー」などで、留学生1人が複数の【情報型】リソースを同時に利用するようになったことが分かる。【利用の理由】については、1位が「趣味」→2.「何も考えずに利用する」→「日本の学習」である。

【情報型】「社会情報サービスリソース」の「トップ3」の結果から、留学生が留学後に接した【情報型】リソースが多様化し、学習者一人が同時に5.6種類の【情報型】リソースを利用するようになったことが分かった。【利用の理由】については、「趣味」や「学習」という具体的な目的で利用することがはっきりしているが、「何も考えずに利用」することも多かった。情報が飛び交う現実社会では、留学生が普通に生活するだけで意識しなくても「豊かな情報リソース」に囲まれる環境にいることが伺えた。

4.4 全体的な分析

学習者が自分の関心や趣味に応じて学習リソースを組み合わせて利用しており、その利用法には個人差があることが考えられる。しかしながら、同年代で似たような学習歴、学習環境のもとで勉強している学生同士では、共通した学習リソースの利用傾向が見られるのではないかと考え、調査を行った。

学習者を取り巻く学習リソース全般を「人的」、「物的」、「社会情

報サービス」リソースに分けて、銘伝の短期留学生 8 人を調べた結果、3 種類のリソースにおいて全て留学前・後の利用状況に変化が見られた。まず、「人的リソース」の利用は「学内」の人のみから「学外」の人とも頻繁接触するようになり、交流の話題が「日本語学習」や特定の目的がない「雑談」から「生活」、「趣味」といった具体的な内容となった。「物的リソース」トップ 2 (テレビ、コンピューター) の利用項目には留学前・後で変わりがなかったが、その利用の目的が留学後は、はっきりと「日本社会・日本人の生活」という内容に関心を寄せるようになった。また、【利用の理由】は具体的に「様々な情報がもらえる」、「日本人や日本について知りたい」といった理由と単純に「面白い」といった理由に大きく 2 分できる。そのほかに留学前は「日本語学習」をするための「本」を利用していたことが留学後「面白い」、「日本人が知りたい」という理由で「漫画・アニメ」、「看板、メニュー」に変わった。最後に「社会・情報サービス」リソースの利用については、まず【体験型】のリソースでは、留学前は「学内」の利用が多かったが、留学後「学外」のリソース利用、「生活手続き」のために「区役所や入管」の利用などがかなり増えた。【体験型】リソースの利用に「姉妹校が機会」を提供していることが大きく貢献していることも調査で分かった。

【情報型】リソースの利用については、トップの座を占める「インターネット」をはじめ、「日本の漫画、アニメ、映画、小説、雑誌」といった大衆メディアの影響が大きく見られ、留学前に比べて、留学後に学生が 1 人で複数のリソースを同時に利用するようになったことが調査で明らかになった。【情報型】リソースの利用について「何も考えず利用」する人も多かったが、それは情報に満ちている現代社会で毎日様々な情報に囲まれ、留学生にとって全てが「新鮮」であると同時に、生活をしているだけで、予期せぬ学習の素材に出会う学習環境に恵まれていることが考えられる。

日本に留学して、そこで生活していけば全てが学習であるということ留学前に学生に言う教師が少なからずいるだろう。しかし、

海外経験がない学生にとっては留学の具体的なイメージが湧いて来ない。短期留学で具体的にどのような「学習リソース」に接触することができ、またこれまでの先輩たちがどのような理由、または機会を通してそれらのリソースを利用しているかについて本稿の調査で浮き彫りにでき、それを留学前の学生への情報提供に生かせたら幸いである。

5. おわりに

本稿では、短期留学生在が留学前、留学後に用いる学習リソース全般及びその利用の理由について調査した。

短期交換留学生在が各リソースと接触することで意図して学びを形成するものもあれば、意図せずに学習に繋がるものもある。古川（1993）では、「日本社会全体が外国人学習者のためのリソースセンターとなり、学習支援システムを形成する（後略）」と述べている。このように学習リソースとの接触が豊かな学習の機会になっている日本国内の学習環境を留学生を送り出す教師が理解しなければならない。留学前に、教師は学習者に対し、これまでに利用したリソースや学習方法を再度認識させるとともに、留学後の学習リソースに対する情報を予め与えるといった働きかけが必要である。そうしたうえで、留学してからさらに日本国内のリソースを個人の目的や関心に応じて活用させ、自律学習に向けた姿勢を培うことができれば短期交換留学の教育効果をより上げることができると思われる。

本稿では、短期留学前・後の留学生的の学習リソースの利用状況や利用の理由について調べた。今回は「体験型」リソースの利用について提携校の寄与が大きかったことが分かったが、先行研究でいう「人的リソース（チューターやサークルなど）の機会提供が少なかったことも分かった。なお、物的リソースについては、今回は携帯電話の利用について調査できなかった。携帯電話は物的リソースとして利用できるほか、人的リソースや社会情報リソースに繋げるためにも欠かせない重要な役割を果たしているため、今後考察の重点

となると考えられる。

今後は留学後の学習者を対象に、学習者が短期留学中に足りないと感じたり、さらに求めたいと思った学習支援について調査し、その結果をまとめて提携校に提供して参考にしてもらうことで、短期交換留学の学習環境の整備に力を入れたい。

参考文献

- 石井恵理子・岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子（2003）「学習リソースの再検討：日本語学習の多様性を読み解くためのフレーム作りに向けて」『第二回日本言語政策学会研究発表会〈資料〉』日本言語政策学会，22-23
- 石黒広昭（2004）『社会文化的アプローチの実際：学習活動の理解と変革のエスノグラフィー』京都：北大路書房
- 内海由美子・吉野文（1999）「短期留学生の日本語実際使用場面の実態と分析：ネットワークの観点から」『千葉大学留学センター紀要』5，30-55
- 岡部真理子・下平菜穂（2004）「日本語学習を語る視点としての学習リソース」，パネルセッション「日本語学習者と学習環境との相互作用：二つの学習者調査から」『2004年日本語教育学会秋季大会予稿集』，233-238
- 岡部真理子（2011）「短期留学生のリソース活用に関する調査研究：リソース活用の実際と、人的リソース活用に影響を与える要因」『山梨大学留学生センター研究紀要』7，1-18
- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子（2005a）「学習者は何をどのように用いて学習しているのか？：日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」『日本学報』第65号1巻，486-492.
- 小河原義朗・金田智子・笠井淳子（2005b）「海外における日本語学習者の学習環境と学習手段」『日本語科学』国立国語研究所18，111-123
- ガシエ・リチャード・キルリ（2007）「ケニアにおける日本語教育学習環境の研究—Kenyatta UniversityとUtalii collegeを中心に—」『日

- 本語言語文化研究会論集』3, 277-304
- 工藤節子(2006)「台湾の日本語学習者のリソース利用—インタビュー調査から—」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 海外報告書』国立国語研究所, 88-107
- 国立国語研究所(2003-2006)『日本語教育の学習手段と学習環境に関する調査研究 海外調査報告書』国立国語研究所
- 下平菜穂・岡部真理子・石井恵理子(2004)「学習者はどのようにリソースを活用するか：日本語を母語としない中学生のケーススタディー」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集』, 137-142
- 鈴木理子(2007)「大衆文化をリソースとした日本語学習：-個別対応型授業で行う意義-」『桜美林言語教育論叢』3, 33-49
- 孫毅權・山本広志(2009)「短期留学生の日本語能力に関する自己上達感—台湾人留学生の場合—」『山形大学紀要(教育科学)』第14巻第4号, 41-56
- 田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』大修館書店
- 武井由紀(2005)「海外の地域社会におけるリソースの活用方法に関する—考察—日本語教育、フランス語教育への相互活用の可能性—」第七回フランス日本語教育シンポジウム 2005年フランス・オルレア
ン, 98-106
- 恒松直美(2012)「短期交換留学生の日本留学による意識変容」『留学生教育』17, 51-60
- 津守愛・平岩桂子(2013)「日本語学習のためのリソース利用状況に関する調査—台湾・香港の成人日本語学習者を対象に—」『第9回国際シンポジウム予稿集』香港中文大学「アジアにおける日本語プロフェッショナル—社会言語学的能力を踏まえた多様な実践—」
- トムソン木下千尋(1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』国際交流基金日本語国際センター
7, 17-29,
- 二宮皓・黄帆(1997)「短期留学生の成功・満足規定要因に関する基

- 礎的研究」『留学生教育』2, 1-10
- 長谷川千秋・奥村圭子（2007）「短期留学生の大学生活についての意識調査：短期交換留学生は大学に何を求めているか」『山梨大学留学生センター紀要』3, 12-31
- 文野峯子（他）（2004）『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）課題番号13680365研究成果報告書』
- 柳川紘子（2008）「学習手段としてのリソースの利用状況について（日中韓3か国合同ジョイントゼミ（北京）」大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書
- 李徳奉（2006）「日本語教育を活かすためのリソース・リテラシー」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究』独立行政法人国立国語研究所『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望』, 22-25
- 林さと子（他）（1998）『第二言語としての日本語学習及び英語学習の個別性要因に関する基礎的研究』平成8～9年度科学研究費補助金基盤研究成果報告書